

第2版まえがき

本書の初版が春秋社から刊行されたのは、今から二十五年前の一九九五年のことでした。初版は二千五百部でしたが、当時は、まだかうじて「かたい本」（笠原、二〇一〇年）が売れていた時代だったおかげで、かなり高額であったにもかかわらず、しばらくして完売になりました。その後、品切れ状態のまま今日に至っているのですが、このところ本書の古書の価額がかなり高騰していることから推測すると、本書を必要とする方が、ありがたいことにまだおられるようです。

そこで、先に再刊した二点の拙著（『幸福否定の構造』（二〇〇四年、春秋社）、『希求の詩人・中原中也』（二〇〇四年、麗澤大学出版会））に続いて、アマゾンからオンデマンド版として再刊することにしました。ただし、本書は文献的研究の要素もあるため、新しい知見を少々盛り込むことにします。

かくして、二十五年前に書いた本をあらためて精読することになったわけですが、「好転の否定」など、まだ明確な形として把握できていなかった概念はあるものの、幸福否定理論全体については、現在とほとんど変わらない理論構成になっていることが再確認できました。

それはよいとしても、やはりと言うべきか、今から見ると大きな問題もあることも同時に判明したわけです。ひとつは、全体として予測が非常に甘かったことであり、もうひとつは、そのこ

とも関係しますが、人間の抵抗の強さがまだ的確に把握できていなかったことです。わかつて
いるつもりだったのですが、まだまだ甘かったわけで、その点では今でも認識が大幅に不足して
いるのではないかと危惧しています。

もうひとつつけ加えることがあるとすれば、経験が不十分で自信がなかったこともあつて、現
行の科学知識に対してかなり遠慮した書きかたになつていたことです。当時は、控え目な書きか
たを心がけていたつもりだったのですが、それにしても引き過ぎていました。

本書では、不明瞭な説明や冗長な記述はなるべく簡潔な形に書き改めるようにしました。その
一方で、現在の眼から見れば、稚拙な着想や表現があちこちにあることに加えて、明らかにまち
がっている部分も散見されるわけですが、それらについてはあえて修正せず、当時の考えとして
そのまま残すようにしました。そのうえで、本文では【補註】として、巻末の註では【追記】と
して解説を加えることにしました。自分の至らなさを反省する材料にするとともに、幸福否定理
論の進展の過程が、読者の方がたにおわかりいただけるようにするためです。

必要最小限にしても、最新の知見を盛り込んだこの第2版が、必要としていただける方々に届
くことを願つてやみません。

二〇二〇年七月十六日

笠原敏雄

初版まえがき

本書は、人間の心がつ力という視点から唯物論を眺めようとする試みである。正統的とされる立場に立つ科学者の陣営から一貫して無視され攻撃され続けてきたひとつの結果として、防御に半ば徹してきた歴史的背景を考えれば、このような無謀とも言える試みがこれまでなかったのは、あるいは当然のことなのかもしれない。とはいえ、従来とは逆の側から眺めた時に、唯物論がどのような形に見えるものかを、ここで明確にしておいてもよいのではなからうか。

本書は、唯物論の絶対的正当性を科学的方法によつて立証することはできないことから、唯物論といえども単なる臆説にすぎないという指摘から出発する。次いで、人間が隠された能力をもっていることを裏づけるさまざまな証拠を、目標指向性という本書の鍵概念を軸として概観し、私の心理療法の中で観察される現象を通じて、これまで無視ないし軽視され続けてきた心の力の実在を浮き彫りにする。そして、心の力の本質がいかなるものかを推測し、しかる後に、私の心理療法の妥当性を確認する必要性と唯物論のもうひとつの顔を明らかにする必要性とから、心理療法全般の根本に潜む問題点について簡単に検討を加える。そして、最後に、唯物論という臆説が必然的に登場し、猛威を振るうに至った理由を推定するつもりである。このように、本

書の主目的は、唯物論とは相容れない、人間の心自体がもつ力の実在を明らかにすることにあるが、それとは別に副次的な目的もある。それは、科学的「立場」に立つ心理学者から不当な扱いを受け続けるとともに、これを支持する陣営からは大幅に歪められることの多かった、真の意味での深層心理学を復権させることである。

本書は、『サイの戦場——超心理学論争全史』（一九八七年、平凡社）および『超常現象のとりえにくさ』（一九九三年、春秋社）という、私がこれまでまとめてきた二編書の結論部にもなっている。関心のある方にはぜひこの二書に目を通していただきたいと願うものであるが、本書だけでもおおよその全体像は把握していただけるように思う。本書では、主に、帰納的な推定や疑問の提起を行ない、演繹的断定は原則として避けるが、そのように見える記述がある場合には、便宜的なものとお考えいただきたい。

最後に、本書の準備ならびに執筆に際してお世話になった数多くの方々に、この紙面を借りて謝意を表したい（肩書きは当時のまま）。東長人先生（横浜市、洪福寺眼科医院）、阿部正先生（神経難病研究所）、カルロス・アルヴァラード氏（エジンバラ大学心理学科）、石井康智教授（早稲田大学文学部心理学科）、恩田彰教授（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所）、郡暢茂先生（徳島市、第一病院）、児玉憲典助教授（杏林大学医学部精神科）、国際医学情報センターの各位には、文献の入手に当たってご尽力いただいた。また、大量の医学、心理学文献の検索および入手については、主として慶応義塾大学医学メディアセンター（北里記念医学図書館）のお世話になった。イアン・ステイヴンソン教授（ヴァージニア大学人格研究室）とジョン・ペロフ教授（エジンバラ大学）

には、励ましの言葉や貴重なご助言をたまわった。なお、ここにお名前を掲げることはできないが、本書に事例として収録する許可をいただいたうえ、原稿の添削をしてくださった六名のクライアントおよび、私の心理療法を進展させてきた協力者でもある私の全てのクライアントに感謝するものである。

一九九五年七月二十二日

笠原敏雄